

調査の基本設計

ベネッセ教育総研 田中 勇作

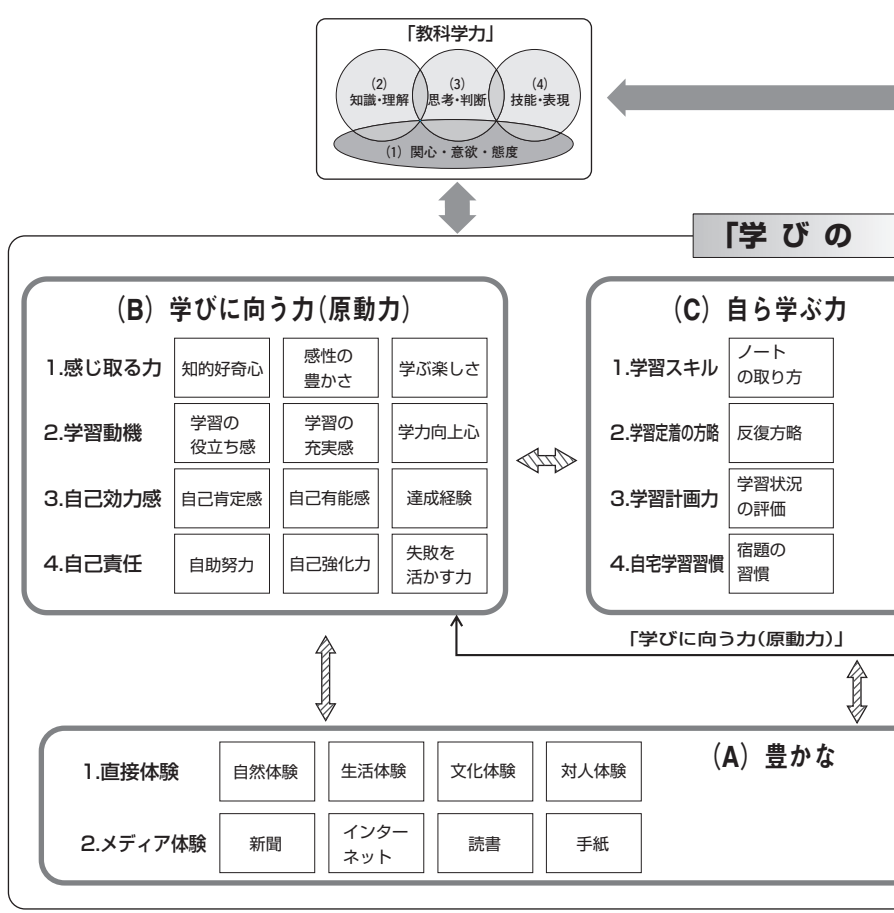
ベネッセ教育総研では、田中博之大阪教育大学助教授ならびに木原俊行大阪市立大学大学院助教授に監修をいただき、21世紀に子どもたちに付けたい「豊かで確かな総合的な学力」とは何かを明らかにし、その実態を把握することを目的に「総合学力研究会」を組織し、小中学校の現場で積極的な実践を推進されている先生方と共に、今回の「学力向上のための基本調査(総合学力基本調査)」の設計・実施・分析を進めてきた。

本節では、第1章で田中博之助教授が報告された「総合学力研究会」としての「学力向上を考える上での7つの問題意識」および「子どもの学力を考えるキーポイント」を踏まえる形で、どのような調査を設計したのかについて説明していきたい。

1 調査設計に際しての留意点

さて、今回の「学力向上のための基本調査」は、一昨年5月に田中博之助教授の監修のもとに実施した「新しい学力を育むための教育調査」の続編的な性格を持つ一方、「新しい学力を育むための教育調査」を通して得られた様々な知見や仮説をもとに、新たに「学びの基礎力」という概念を導入し、より幅広い視点と領域から、「豊かな学力を確実に育成する」上での学校や家庭における望ましい取り組みの視点を提供することを目指して設計された。(なお、「新しい学力を育むための教育調査」の詳細については、田中博之監修/ベネッセ文教総研編

■図表 2-1-1 「学びの基礎力」の構造モデル



『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』（2002年）を参照。同報告書の全文は、ベネッセ教育総研のWebサイト（ベネッセ教育総研ONLINE〔<http://www.view.21.jp>〕）で参照できる。）

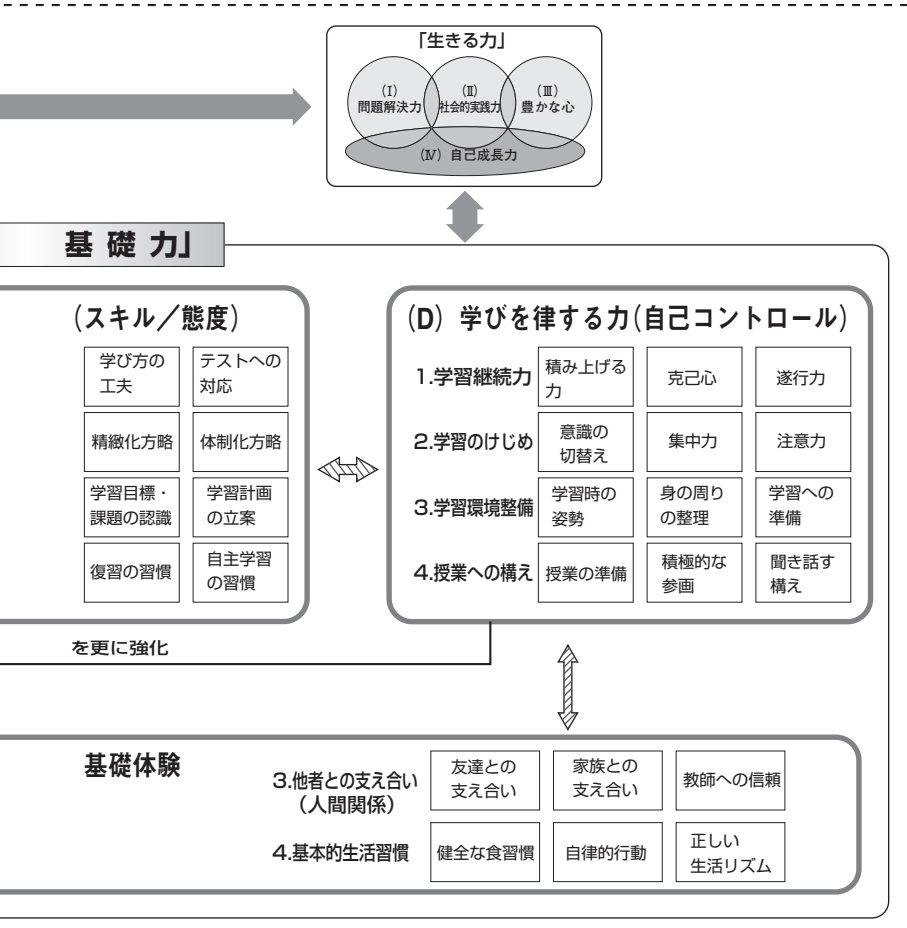
調査仮説および調査項目の設計に当たっては、以下の点に留意し、約1年間にわたり「総合学力研究会」メンバーでの討議・検討を行った。

- ① 「学力向上」に関わる日々の実践を踏まえた現場教師の実態認識や課題意識を反映させた「現場のリアリティ重視」の調査仮説および調査項目を設計する。
- ② これまでに学習心理学や各種調査によって研究・実証されてきた「学習のメカニズム」や学びに関わる各種要因等の様々な知見を統合する形で、相互の関連性や構造を俯瞰できる「仮説モデル」を設定し、そのモデルに沿った調査仮説および調査項目を設計する。
- ③ 「学力向上」に向けての具体的な施策や指導・学習の在り方についてのヒントを提供していけるように、学校現場における様々な実践事例を踏まえた「効果の見える(た)活動」をベースとした調査項目を設計する。

第1章図2は、そうした討議・検討を通してまとめ上げた、「総合学力研究会」における「総合学力のモデル」として、今回の調査における前提となる「調査仮説」であると共に、後述の各調査バッテリー設計のフレームワークとなっている。

2 「学びの基礎力」の構造モデル

さて、図表2-1-1は、**1**の調査項目設計に当たっての留意点で触れた①および②にそって、これまで学習心理学等や各種調査を通して研究・実証されてきた子どもたちの学習意識や学習動機、



学習スタイルや学習方略、各種体験等に関する様々な知見や、学校現場における実践や経験を通して「見えない学力」といったことばで多くの先生方が抱えている認識等を、「学びの基礎力」として、「A. 豊かな基礎体験」、「B. 学びに向かう力」、「C. 自ら学ぶ力」および「D. 学びを律する力」の4領域に再構成し、整理したものである。

「総合学力研究会」では、この「学びの基礎力」を、学習者の行動や態度形成に大きな影響を及ぼしているといわれる「A. 豊かな基礎体験」をベースに、学習の原動力となる「B. 学びに向かう力」、自主的で意図的な学習を進めていくスキルや習慣である「C. 自ら学ぶ力」、および学習行動を適切な方向へとコントロールする「D. 学びを律する力」の3つの基礎力が相互に関与し合い、複合的に形成さ

■図表 2-1-2 「学びの基礎力」下位項目についての因子分析結果

| 「学びの基礎力」項目名 | | | 因子No.1 原動力 | 因子No.2 姿勢・構え | 因子No.3 体験・体感 | 因子No.4 学習スタイル |
|-------------|--------------|------------|---------------|-----------------|-----------------|------------------|
| 問6④ | B 2. 学習動機 | 学習活動の充実感 | 0.65 | 0.18 | 0.16 | 0.07 |
| 問6⑤ | B 2. 学習動機 | 学力向上心 | 0.62 | 0.18 | 0.13 | 0.13 |
| 問6⑦ | B 4. 自己責任 | 自助努力 | 0.56 | 0.18 | 0.09 | 0.04 |
| 問6③ | B 2. 学習動機 | 学習の役立ち感 | 0.52 | 0.20 | 0.15 | 0.11 |
| 問6⑧ | B 4. 自己責任 | 自助努力 | 0.50 | 0.12 | 0.08 | 0.04 |
| 問6① | B 1. 感じ取る力 | 学ぶ楽しさ | 0.49 | 0.20 | 0.20 | 0.23 |
| 問8③ | C 1. 学習スキル | 学び方の工夫 | 0.43 | 0.30 | 0.22 | 0.17 |
| 問7③ | D 1. 学習継続力 | 遂行力 | 0.42 | 0.35 | 0.15 | 0.26 |
| 問6② | B 4. 自己責任 | 失敗を活かす力 | 0.42 | 0.39 | 0.16 | 0.13 |
| 問7② | D 1. 学習継続力 | 克己心 | 0.42 | 0.35 | 0.17 | 0.17 |
| 問6⑥ | C 3. 学習計画力 | 学習目標・課題の認識 | 0.42 | 0.02 | 0.22 | 0.16 |
| 問6⑨ | B 4. 自己責任 | 自己強化力 | 0.41 | 0.15 | 0.27 | 0.13 |
| 問3⑩ | B 3. 自己効力感 | 自己肯定感 | 0.41 | 0.13 | 0.33 | 0.02 |
| 問6⑩ | C 3. 学習計画力 | 学習状況の評価 | 0.34 | 0.20 | 0.26 | 0.24 |
| 問8⑦ | C 4. 自宅学習習慣 | 宿題の習慣 | 0.12 | 0.56 | 0.14 | -0.07 |
| 問7⑫ | D 4. 授業への構え | 授業への準備 | 0.12 | 0.53 | 0.10 | -0.01 |
| 問3⑫ | D 4. 授業への構え | 聞き話す構え | 0.15 | 0.50 | 0.16 | 0.02 |
| 問7⑬ | D 4. 授業への構え | 積極的な参画 | 0.41 | 0.50 | 0.15 | 0.15 |
| 問8① | C 1. 学習スキル | ノートの取り方 | 0.20 | 0.47 | 0.17 | 0.06 |
| 問7⑤ | D 2. 学習のけじめ | 集中力 | 0.31 | 0.44 | 0.06 | 0.27 |
| 問8⑧ | C 4. 自宅学習習慣 | 自主的な学習 | 0.25 | 0.43 | 0.08 | 0.27 |
| 問7⑪ | D 3. 学習環境の整備 | 学習への準備 | 0.26 | 0.39 | 0.17 | 0.17 |
| 問8② | C 1. 学習スキル | ノートの取り方 | 0.16 | 0.39 | 0.36 | 0.21 |
| 問7⑦ | D 3. 学習環境の整備 | 学習時の姿勢 | 0.20 | 0.38 | 0.16 | 0.36 |
| 問7④ | D 2. 学習のけじめ | 意識の切り替え | 0.37 | 0.38 | 0.10 | 0.11 |
| 問7⑧ | D 2. 学習のけじめ | 注意力 | 0.05 | 0.33 | -0.10 | 0.12 |
| 問8⑥ | C 1. 学習スキル | テストへの対応 | 0.26 | 0.32 | 0.14 | 0.25 |
| 問7① | D 1. 学習継続力 | 積み上げる力 | 0.32 | 0.32 | 0.24 | 0.23 |

れていく、「総合学力」の基底をなすものにとらえている。

そして、こうした「学びの基礎力」は、「教科学力」や「生きる力」に対して強い影響を持つと共に、「教科学力」や「生きる力」の伸長・発達が、「学びの基礎力」の質的变化・成長を促すという相互関連の構造モデルを示すものとなっている。

なお、これらの「学びの基礎力」に関する今回の調査データについて因子分析したところ、**図表 2-1-2**に示した「原動力(因子No.1)」、「姿勢・構え(因子No.2)」、「体験・体感(因子No.3)」および「学習スタイル(因子No.4)」の4因子が抽出された。これらの因子は、それぞれ当初の構造モデルにおける「B. 学びに向かう力」、「D. 学びを律する力」、「A. 豊かな基礎体験」そして「C. 自ら

■図表 2-1-2(つづき)

| 「学びの基礎力」項目名 | | 因子No.1 原動力 | 因子No.2 姿勢・構え | 因子No.3 体験・体感 | 因子No.4 学習スタイル | |
|-------------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|------------------|-------|
| 問3⑭ | B 3. 自己効力感 | 自己有能感 | 0.20 | 0.09 | 0.51 | 0.07 |
| 問3① | A 3. 他者との支え合い | 友達との支え合い | 0.16 | 0.13 | 0.50 | -0.03 |
| 問1⑩ | A 1. 直接体験 | 文化体験 | 0.02 | 0.04 | 0.46 | 0.13 |
| 問1⑤ | A 1. 直接体験 | 対人体験 | 0.11 | -0.02 | 0.42 | 0.05 |
| 問1⑨ | A 2. メディア体験 | 手紙 | 0.02 | 0.21 | 0.42 | 0.06 |
| 問1⑥ | A 1. 直接体験 | 対人体験 | 0.09 | -0.06 | 0.41 | 0.03 |
| 問1② | A 1. 直接体験 | 文化体験 | 0.03 | 0.07 | 0.41 | 0.24 |
| 問3⑪ | B 3. 自己効力感 | 達成経験 | 0.32 | 0.18 | 0.40 | 0.04 |
| 問3⑨ | B 1. 感じ取る力 | 感性の豊かさ | 0.22 | 0.14 | 0.39 | 0.11 |
| 問3⑬ | D 4. 授業への構え | 聞き話す構え | 0.23 | 0.34 | 0.38 | 0.08 |
| 問3③ | A 3. 他者との支え合い | 家族との支え合い | 0.13 | 0.26 | 0.36 | -0.02 |
| 問1⑧ | A 2. メディア体験 | インターネットへの接触 | 0.06 | 0.04 | 0.35 | 0.13 |
| 問3⑧ | B 1. 感じ取る力 | 知的好奇心 | 0.23 | -0.04 | 0.35 | 0.18 |
| 問1① | A 1. 直接体験 | 自然体験 | 0.14 | -0.04 | 0.33 | 0.13 |
| 問3② | A 3. 他者との支え合い | 家族との支え合い | 0.29 | 0.23 | 0.32 | -0.07 |
| 問1⑦ | A 2. メディア体験 | 新聞との接触 | 0.13 | 0.08 | 0.32 | 0.26 |
| 問3④ | A 3. 他者との支え合い | 教師への信頼 | 0.21 | 0.28 | 0.31 | 0.01 |
| 問9② | C 4. 自宅学習習慣 | 学習時間 | 0.05 | 0.03 | 0.12 | 0.62 |
| 問9① | C 4. 自宅学習習慣 | 学習時間 | 0.06 | -0.01 | 0.12 | 0.54 |
| 問8⑨ | C 4. 自宅学習習慣 | 復習の習慣 | 0.21 | 0.31 | 0.16 | 0.54 |
| 問8⑪ | C 2. 学習定着の方略 | 体制化方略 | 0.29 | 0.29 | 0.25 | 0.42 |
| 問8⑩ | C 2. 学習定着の方略 | 精緻化方略 | 0.25 | 0.31 | 0.29 | 0.42 |
| 問8④ | C 2. 学習定着の方略 | 反復方略 | 0.35 | 0.34 | 0.21 | 0.41 |
| 問7⑥ | C 3. 学習計画力 | 学習計画の立案 | 0.22 | 0.36 | 0.21 | 0.41 |
| 問8⑤ | C 2. 学習定着の方略 | 体制化方略 | 0.36 | 0.22 | 0.25 | 0.36 |
| 問8⑫ | C 4. 自宅学習習慣 | 自主的な学習 | 0.32 | 0.10 | 0.31 | 0.32 |

※表中のアミかけ部分は、因子分析によって抽出された4つの因子に該当する当初の構造モデルの各領域の下位項目であることを示す。

学ぶ力」に該当する結果となり、「学びの基礎力」における 4 領域の設定には妥当性があることがほぼ検証されたことをお伝えしておきたい。

3 「学力向上のための基本調査」の全体像

以上、今回の「学力向上のための基本調査」における前提となる調査仮説や基本仮説、「学びの基礎力」の構造モデル等についてその概要を紹介してきたが、今回の調査設計に関わるプロセスと全体像を図表 2-1-3 に示した。

誌面の関係で詳細については割愛するが、各調査票と基本仮説の関係や第 3 章以降での仮説検証の展開を俯瞰していただく上での参考にしていただければ幸いである。

なお、今回の調査で用いた「生きる力」の自己評価項目は、前述の「新しい学力を育むための教育調査」で使用した 40 項目をベースに改訂を行い、「Ⅰ. 問題解決力」(前回調査では「能力・スキル」領域に該当)、「Ⅱ. 社会的実践力」(前回調査では「社会への適応力」領域に該当)、「Ⅲ. 豊かな心」(前回調査では「態度・価値観」領域に該当)、「Ⅳ. 自己成長力」(前回調査では、「自己成長力」領域に該当)の 4 つの領域に再構成し 30 項目を設定した。

今回の改訂に当たっては、主に「社会への適応力」および「態度・価値観」の領域について、領域の再定義ならびに項目の見直し・追加を行った。前回の調査では若干「今日的課題への関心度合い」を問う項目に偏っていた「社会への適応力」の領域を、より積極的な社会参画の場面にまで広げ、「今日的課題への関心」項目を厳選するとともに、前回は「態度・価値観」の領域に含まれていたいくつかの項目を移行する形で「Ⅱ. 社会的実践力」として項目の見直しを行った。また、「態度・価値観」の領域については、「Ⅱ. 社会的実践力」への一部項目の移行とともに、「豊かに生きる」という新たな切り口のもと、「熱意」や「思いやり」、「楽しむ力」といった、多くの人たちがふだんの生活を通して実感している項目を追加することで、「Ⅲ. 豊かな心」という領域に設定し直した。なお、各項目の詳細については、第 2 章第 4 節を参照いただければ幸いである。

なお、今回の調査では調査対象となった小学 5 年生、中学 2 年生のクラス担任教師に対して、児童・生徒の「生きる力」や「学びの基礎力」の状況に対する認識や学校における指導・活動の状況についてのアンケート調査を行っているが、本報告書では、児童・生徒対象の調査結果を中心に分析・考察を行ったことをお断りしておきたい。

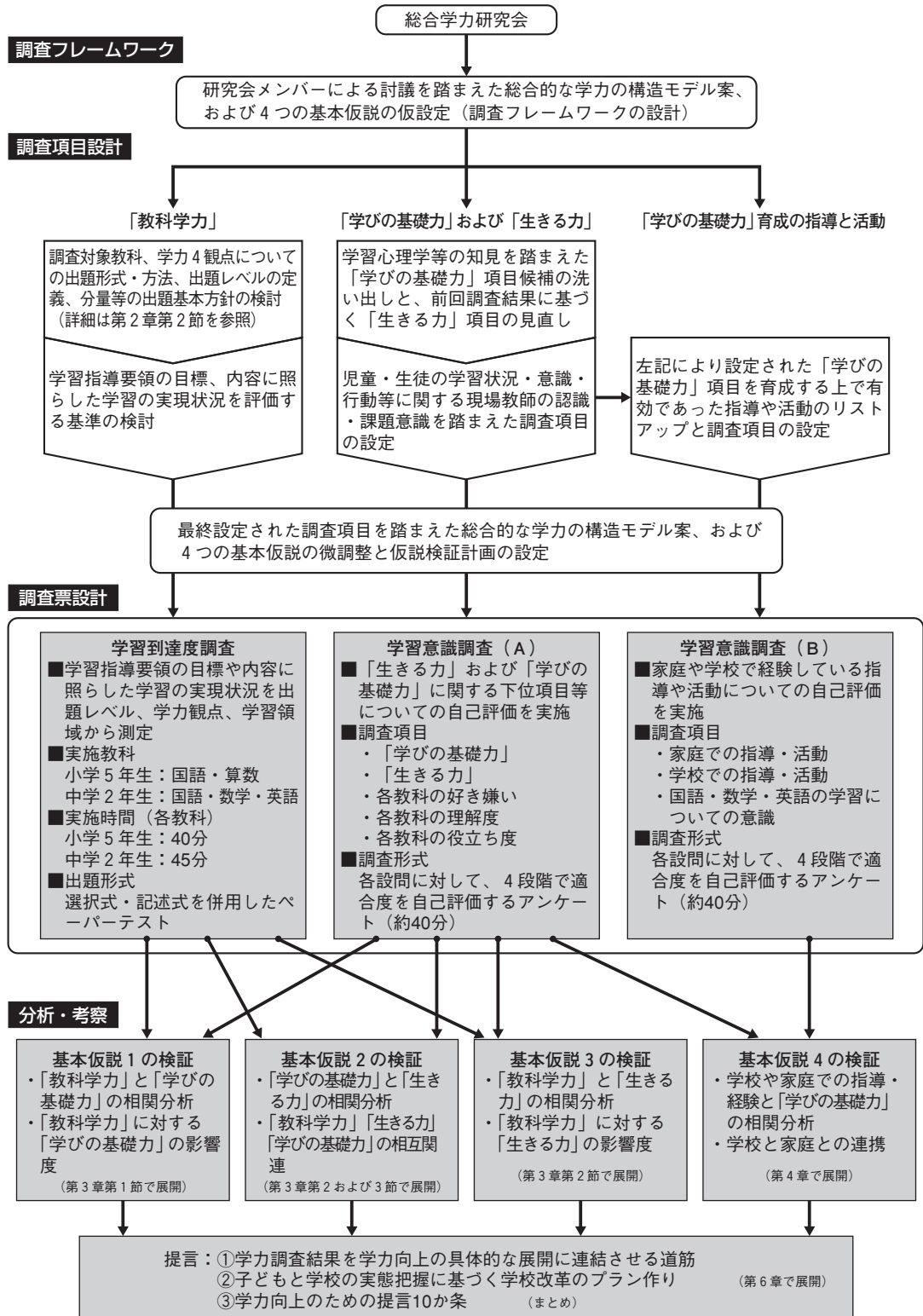
4 調査概要

1. 調査名称 「学力向上のための基本調査 2003」(別称:「総合学力基本調査」)

2. 調査のねらい

- ①児童・生徒の「教科学力」「生きる力」「学びの基礎力」の現状を調査し、3 つの力の関係性を探り、「総合学力のモデル」の検証を行う。
- ②児童・生徒が学校や家庭で経験している指導や活動が、子どもたちの「学びの基礎力」等の育成にどのような影響を及ぼしているかを探り、学力向上に向けての具体的な施策検討に役立つ資料や視点を提供する。

■図表2-1-3 「学力向上のための基本調査」設計のプロセスと全体像



3. 調査対象

小学校第 5 学年児童・教師 および中学校第 2 学年生徒・教師

4. 調査時期

2003 年 1 月 27 日～ 2 月 15 日 (各校は左記期間の任意の日程で実施)

5. 調査の内容

| 対 象 | 名 称 | | 内 容 |
|----------|-----------------|------------------|--|
| 児童・生徒 | 学習到達度調査 | ①国語学力調査 | ・当該学年各教科における学習の到達状況を、「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」の観点から測る設問で構成。出題形式は選択式と記述式を併用 ※なお、「関心・意欲・態度」は学習意識調査で測定 |
| | | ②算数／数学学力調査 | |
| | | ③英語学力調査 (中 2 のみ) | |
| | 学習意識調査 | ④学習についてのアンケートA | ・学習を進める基礎的な力(「学びの基礎力」)、および「生きる力」についての自己評価 |
| | | ⑤学習についてのアンケートB | ・家庭での生活や学習状況 ・学校での指導や学習活動 ・各教科の学習に対する意識 |
| 当該学年担当教師 | ⑥指導の状況に関するアンケート | | ・学校における指導内容・状況 ・子どもの実態(「学びの基礎力」や「生きる力」)に対する認識 |

6. 調査方法

東北・関東・中部・近畿・中国・九州の小学校 23 校 (児童数計 1,707 名、教師数計 56 名)、中学校 16 校 (生徒数計 2,023 名、教師計 71 名) に対して、上記 5 の内容を学校通しによる自記式調査 (テスト) にて実施。

7. 調査主体 「総合学力研究会」

監 修：大阪教育大学助教授 田中博之

大阪市立大学大学院助教授 木原俊行

メンバー：栗田稔生 (大阪教育大学附属平野小学校教諭)

重松昭生 (守口市立八雲小学校教諭)

外山善正 (大阪教育大学附属平野小学校教諭)

中川一彦 (大阪教育大学附属平野小学校教諭)

西畑寧三 (大阪市立長吉出戸小学校教諭)

馬場博志 (大阪教育大学附属平野小学校教諭)

井寄芳春 (大阪教育大学附属平野中学校教諭)

久保田重幸 (彦根市立中央中学校教諭)

小林弘典 (大阪教育大学附属平野中学校教諭)

佐藤由美 (大阪教育大学附属平野中学校教諭)

田口 順 (大阪教育大学附属平野中学校教諭)

田中龍三 (大阪教育大学附属池田中学校教諭)

野中拓夫 (大阪教育大学附属平野中学校教諭)

事務局：ベネッセ教育総研